



日本小児がん看護研究会も3年目を迎え、皆さまのお力により活動も充実しつつあります。今回のニュースレター第3号では、第2回日本小児がん看護研究会、第1回関東地方研修会など、平成16年度の活動報告や、第3回日本小児がん看護研究会などのお知らせをいたします。

第3回 日本小児がん看護研究会のお知らせ

第3回日本小児がん看護研究会

テーマ：小児がんをもつ子どもと家族へのケアの検証と創造
日時：平成17年11月25日～26日

会場：栃木県総合文化センター、宇都宮東武ホテルグランデ
会長：森美智子

演題募集：

5月10(火)～6月20(月)正午までオンラインのみ
<http://www2.convention.co.jp/2005jspo-jspn/>

第3回日本小児がん看護研究会は、平成17年日本小児がん学会・日本小児血液学会同時期開催(平成17年11月25日～27日)において、25日13時30分～18時、26日9時～18時に開催します。

内容は、オーストラリア・モナッシュ大学講師の下稲葉かおりさんに教育講演「小児がんをもつ子どもと家族への緩和ケア」をお願いし、シンポジウムは「子どもの望む苦痛緩和の実現をめざして」、ジョイント学会最大の合同シンポジウムは「トータルケアの心と実践」です。要望演題(外来化学療法を受けている子どもと家族の看護)、一般演題と多彩な内容をプログラムし、明日に向いより良い医療・看護をめざしています。多くの皆様の参加を得て、討論を深め、成果を実践に役立てたいと考えています。多くの方が演題応募・学会参加して下さいよう、お待ち申し上げています。

第2回 日本小児がん看護研究会の報告

第2回日本小児がん看護研究会は、「小児がんを

もつ子どもと家族へのケアの検証と創造」をテーマに、昨年11月21日(日)京都国際会館にて日本小児がん学会・日本小児血液学会の同時期開催に、日本小児がん学会看護セッションという形で開催されました。第2回研究会をこのような形で行うことを小児がん看護研究会の役員会で議論し、医師やがんの子供を守る会の方々と一緒に準備をしてきましたが、その過程の中でさまざまなことを考えさせられました。小児がん看護実践・教育・研究者だけでなく子どもに関わる多職種の方々や、当事者・家族もともに集う本研究会の立場から、研究会に参加してくださる当事者・家族・一般の方々を、どのようにうけいれるか等について、各団体の考え方の違いを目の当たりにし、看護のアイデンティティを再認識するなど、困難な中にも学びが大きく、「他職種と協働する」上でコミュニケーションの大切さを感じました。

また、準備をすすめていく中で、日本的小児がんの治療・研究の確立に熱い思いで関わっている医師の方々、患者・家族にとっての普通の生活を支えようと活躍しているボランティアの方々等、さまざまな方々との出会いもあり、真剣にそれぞれの立場で仕事に取り組んでおられる姿に感激し、とても勇気づけられました。

当日は、定員250人の会場が参加者であふれ、急遽、会場前のロビーにテレビ中継で対応し、500人ぐらいの方の参加がありました。

教育講演は、九州がんセンターの竹之内直子氏による「セントジュード小児病院における小児がん専門看護師の教育と役割」で、米国での研修の中での気づきや学びを、九州がんセンターでの看護実践の体験もふまえて、参加者に伝えていただきました。ジョイントシンポジウム1は「小児がんをもつ子どものトータルケアの現状と課題」、ジョイントシンポ

ジウム2は「治療を終えた子ども達—小児がん経験者のケアに関するガイドラインの作成に向けて—」でした。小児がんの子どもと家族の問題に真正面から取り組んだテーマで、さまざまな意見が交わされました。今後継続して討議していく課題もあります。一般演題の口演16題、ポスター22題と、どのプログラムも活発な意見交換がなされ、時間的にも内容的にもとても充実した一日となりました。参加者のアンケート結果からも「よかった」という意見が多く聞かれました。

準備から当日の運営に至るまで、小児がん看護研究会役員の方々、京都府立医科大学の杉本徹先生をはじめ諸先生方、鎌田久子師長様、堀井匡子師長様から温かいサポートをいただき、また、講座スタッフや大学院生の勤勉なお仕事により、この研究会をなんとか無事終えることができました。この場をお借りして皆様に感謝申し上げます。

この会で得たこと、明らかになったことや解決すべき課題を、研究会として、あるいは他職種の方々と一緒に、引き続き検討し、研究活動を深め、小児がんをもつ子どもと家族へのケアの向上をめざしていきたいと考えています。

第2回日本小児がん看護研究会幹事
内田雅代（長野県看護大学小児看護学講座）

第2回日本小児がん看護研究会のプログラムをご紹介します。

教育講演

セミナー「小児病院における小児がん専門看護師の教育と役割」
九州がんセンター 竹之内直子
ジョイントシンポジウム
小児がんをもつ子どものトータルケアの現状と今後の課題
ある臨床研究医の立場から見た小児がんをもつ子どものトータルケア
千葉県がんセンター 中川原章
大阪府立母子保健総合医療センターにおけるトータルケアの取り組み
大阪府立母子保健総合医療センター 渡辺寿美子
(財)がんの子供を守る会の活動と今後の課題
(財)がんの子供を守る会 池田文子

教育支援構築の諸課題

西南女学院大学保健福祉学部 谷川弘治
入院中の子どもが社会との接点を持ち続けるための一方法
京大病院小児科「ランティアグ・ルーフ」「にこにこトマト」 神田美子
小児がん経験者のケアに関するガイドライン作成に向け
小児がんの長期フォローアップ外来
あけぼの小児クリニック順天堂大学小児科 石本浩市
小児がんの子どもにとっての「ふつうの生活」の意味を考える
日本赤十字北海道看護大学 梶山祥子
親と子にとっての小児がん
(財)がんの子供を守る会東海支部 後藤ゆかり
小児がんを経験したこと～起こり得る問題とその対処について～ 小児がん経験者の会フェロトゥモー 小俣智子

一般口演

看護師の意識・役割

日本における小児がん看護実践・研究の動向
日本赤十字北海道看護大学 梶山祥子
患者・家族参加の看護計画立案と実施に取り組んで
兵庫県立こども病院 傑馬紀
小児がん看護に携わる看護師のストレスとソーシャルサポート
に関する研究 北里大学看護学部 石川福江
小児がん患者の病名告知における看護師の役割～看護師を対象とした意識調査から～ 長野県立こども病院 井上品子
10代患者の心の問題に関する看護師へのアンケート調査～小児がん20事例の分析 北里大学看護学部 丸光恵

活動報告

小児がん患児家族調査報告(2)～会員を対象としたアンケート調査 現在の状況～ (財)がんの子供を守る会 樋口明子
がんのことをもつ親の会の活動(相談)状況から親の会の役割について検討する 静岡県立短大看護学科 金城やす子
慰問活動におけるコラボレーションの実践的検証

広島大学大学院保健学研究科 永田真弓
千葉県における看護師のネットワーク作りを目指して 千葉大学看護学部 小川純子
病気とたたかう子どもたちに夢のキャンプを そらぶちキッズキャンプ 横山清七

子どもと家族への支援

「移植を受けるみんなのハンドブック」の作成と活用
横浜市立大学医学部附属病院 佐藤奈々子
幼少同胞ドナーに対する倫理的問題を解決するための実施基準の検討 茨城県立こども病院 西野美千代
Death-Educationの実践・評価-小学校低学年を対象として- 旭川医科大学大学院医学系研究科 宮川妃佐子
繰り返し化学療法を受ける脳腫瘍をもつ子どもの体験の構造と乗り越えるためのプロセス 筑波大学附属病院 田村恵美
長期入院患児のストレスに対する看護師の役割を考える一例を通して 京都府立医大病院子ども6号 中村美穂
小児のがんの患児を抱える家族への心理的援助 立教大学大学院心理学専攻 西尾温文

一般ポスター

口腔・皮膚ケア

化学療法を受ける患児への口腔ケア～精神発達遅滞があり歯磨き習慣のない児に対して～ 神戸市立中央市民病院 林恵子
化学療法による口腔内・咽頭痛をもつ子どもの疼痛緩和 兵庫県立こども病院 濱田 米紀
化学療法を受ける学童の口腔ケアに対する思い

千葉県こども病院 作田香織
中心静脈カテーテル挿入中の皮膚ケアの検討～刺入部周辺の皮膚ケア～ 名古屋第二赤十字病院小児科病棟 岩田留美子
小児骨髄移植看護における中心静脈カテーテルの安全な固定方法の検討 神戸市立中央市民病院七階北病棟 豊田恵美
子どもと家族へのケア

長期入院する学童の生活行動に対する援助方法の検討 東京医科歯科大学医学部附属病院 西田志穂
無菌管理簡略化で得られたもの～子どものQOL向上を考える

大阪府立母子保健総合医療センター4階西病棟 松本直子
特定機能病院における終末期患児の外来診療に際する苦痛軽減にむけた援助方法の検討 順天堂医院看護部 辻山洋美
母親と患児の自立への支援～情報伝達ツールにママカードの活用が有効だった事例より～ 長野県立こども病院 千国美保
小児がんターミナル期患者家族に対してデジタルカメラを使用して児の生活を伝えた事例 北里大学病院 松尾美智子
病名告知を受け、治療を行った中学生の子どもとの関わり～看護師の意識変化～ 兵庫医科大学病院小児病棟 湯浅眞裕美
遊び・プリバレーション

小児がん看護におけるプリバレーションの検討 兵庫県立大学看護学部 三宅一代
入院中の子どもにもたらすあそびの効果～保育活動の中でみられた子どもの変化 大阪府立母子保健総合医療センター 豊島真理

手術後、集中治療室へ入室する幼児へのプリバレーション
順天堂医院看護部 勝倉昌恵
幼児期における患児・家族に対する保育士との連携
兵庫県立こども病院 小林必生
小児がん治療に伴う検査や処置におけるチャイルド・ライフの
関わり 浜松医科大学小児科 世古口さやか
家族への支援
白血病患児の家族内ストレスがきょうだいのツイとして現れた事例
に対する心理療法 筑波大学人間総合科学研究所 永澤優子
母子家庭の終末期小児がん患児の同胞への看護師による支援
国立がんセンター中央病院小児科 永吉美智枝
骨髄移植ドナーを再検討することになった家族の精神的援助に
ついての検討 東海大学医学部附属病院 染谷亜希子
ALL を発症した思春期男児を持つ母親の心理過程の一考察
東海大学医学部附属病院 四家奈保子
多変量解析による、悪性疾患児の日本の親がもつ問題状況の
分析 日本赤十字武藏野短期大学 森美智子
ターミナル期にある小児がんの子どもと家族をケアする看護師
のサポートニーズ 千葉大学大学院看護学研究科 中村美和

第1回 関東地方研修会の報告

平成17年2月26日 神奈川県立保健福祉大学の階段教室をお借りして、第1回関東地方研修会を行いました。当日は役員打合せ室から東京湾唯一の自然島「猿島」をきれいに見ることができ、お天気にも恵まれました。当初、関東地方研修会にはどのくらい人数が集まるのか予想もつきませんでしたが、最終的には112名の参加者を得ることができました。内訳は会員23名、非会員80名、学生1名、家族・一般参加8名で非会員の方が会員を上回りました。

【講演1】 10代患者の心の問題の観点より（北里大学看護学部 丸光恵）では、10代の慢性疾患患者の心の問題について看護師を対象とした全国調査より、小児がん20事例の傾向をまとめて報告しました。限られた事例数ではありましたが、アンケートと自由記載の分析をふまえて、10代の小児がん患者の心の問題とは、身体的苦痛や苦痛を伴うケアなどから生じている抑うつ状態である可能性が高く、身体ケア特に症状コントロールの充実が、10代患者の心の問題の発生予防につながるのではないかと提言しました。

【講演2】 症状コントロールの実際（聖路加国際病院 小児科医師 小澤美和氏）は臨床事例を具体的に示しながら、小児がん患者が苦痛と感じる症状として、倦怠感、痛み、呼吸困難、不眠・不穏、などへのアプローチについて解説いただきました。鎮痛剤については、安全性や効用についての説明と共に、肝障害の危険性に注意すればアセトアミノフェンの安全性が一番高い事を強調され、フェンタニーファッチの使用方法や注意点についても言及

されました。さらに処置時には薬物を使用する前の苦痛体験や説明によっては薬物使用を拒否する子どももいる事や、持続的な疼痛の場合は子どもが効果を実感できるような補足説明が重要である事など、看護師の役割について多くの示唆を頂きました。

【講演3】 小児がんの子どもと家族の看護－化学療法における症状マネジメントを通して（千葉大学大学院看護学研究科 博士後期課程 中村美和氏）では化学療法をうける子どもの苦痛について文献や米国の状況を元に総括的なレビューをしたのち、口内炎に焦点をあてて看護の実際をお話いただきました。氏が行った介入研究の2事例をもとに、患者・家族のニーズから導く看護目標のたて方と、情報提供、共感、選択権の尊重などの実際について、時期別に詳細にご説明いただきました。中でも初回の化学療法時には口内炎予防や発症後のケアに関する余裕がないため、特に看護師がイニシアチブをとって行う必要があることを強調され、治療開始から2ヶ月を越える時期までの看護援助指針もお示しいただきました。

【講演4】 命 終わるまで心ある医療を・・・（星の会 小原弘子氏）では、3年3ヶ月の闘病生活の後に亡くなったご子息と家族の体験をお話頂きました。10の病院を訪ね歩き、6カ所の病院で入退院を繰り返した自らを「ガン難民」と形容され、「ママ、僕、頑張るから助けてよ」という子を「助けたい」と思う親の気持ちは間違っていますか？と呼びかけられました。そして、医療者の心ない言葉や治療態度にいかに傷つけられたか、また気持ちが和らいだ言葉や対応がどのようなものだったのか、その時々の状況を詳しくお話を下さいました。様々な専門医や病院施設での体験が語られる中で、「闘病生活が長くなるにつれ謙虚な態度をとるように心がけた、「何でこんな扱いを」とあってもぐっと我慢するようになった」との言葉にははっとさせられた方も多かったのではないでしょうか？最後にいただいた「言葉にできない声がたくさんある。聞こえない声に耳を傾けられる人」になって、というメッセージを真摯に受けとめたいと思いました。

事後アンケートでは、多くの方々より大変好評をいただきました。会を運営するにあたりご協力くださいました皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

第1回関東地方研修会 研修委員 丸 光恵
(東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科)

平成 16 年度役員からの報告

〔会員について〕

平成 17 年 3 月現在、一般会員数は 164 名、贊助会員は、へるす出版（株）とキリンピール（株）です。

〔平成 16 年度役員会〕

平成 16 年度の役員会は、下記の日程と場所にて 5 回開催されました。

- 第1回 2004年5月15日（長野県看護大学）
- 第2回 2004年8月3日(AFLACペアレンツハウス)
- 第3回 2004年10月16日（都内会議室）
- 第4回 2004年11月20日（国立京都国際会館）
- 第5回 2005年2月19日(日本赤十字武蔵野短期大学)
- 第6回 2005年3月29日(日本赤十字武蔵野短期大学)

〔会則の変更について〕

役員会にて、下記の内容を会則に追加いたしました。

第4章 会則

贊助会員 個人 1 口 10,000 円/年
法人 1 口 50,000 円/年

第7章 委員会：本会に必要な委員会をおき、委員長をおく

第11条 各委員会

- ① 研究員会
- ② 研究会誌・編集委員会
- ③ 研修委員会

〔役員について〕

役員

会長 梶山祥子
副会長 丸光恵・門倉美知子
幹事

庶務 内田雅代
会計 平出礼子・上坪成子
研究会 小原美江・松岡真里
機関誌 小川純子・伊庭久江
広報 富岡晶子・前田留美
監事 森美智子・石橋朝紀子・石川福江
委員会

研究委員 内田雅代・小原美江
編集委員 森美智子・野中淳子
研修委員 丸光恵・松岡真里



〔会計報告〕

〈一般会計 収入の部〉

項目	決算額(円)	内訳
1.会費		
会員年会費	650,000	130名（新入会65名）
贊助会員会費	70,000	へるす出版・キリンピール
2.寄付金・雑収入	186,390	
3.前年度繰越金	565,474	
計	1,471,864	

〈一般会計 支出の部〉

項目	決算額(円)	内訳
1.会議費	3,921	役員会お茶代
2.事業費	108,125	第1回関東地方研修会
3.研究会事業費	150,000	特別会計へ
4.事務費	78,952	通信費・人件費など
合計	340,998	

収入 1,471,864
支出 340,998
収支 1,130,866

〈特別会計 収入の部〉

項目	決算額(円)
第1回研究会繰越金	390,238
一般会計より	150,000
合計	540,238

〈特別会計 支出の部〉

項目	決算額(円)	収入
第2回研究会事業費	234,925	540,238
合計	234,925	305,313

平成 16 年度会計は、監事森氏、石川氏により監査を受け、承認されたことをご報告いたします。



第4回 日本小児がん看護研究会のお知らせ

第4回日本小児がん看護研究会も、第22回小児がん学会看護セッションとして、平成18年11月24日～26日、大阪府立母子保健総合医療センターの血液腫瘍科病棟看護師長である安達弘美さんを会長に開催予定です。テーマにつきましては、現在検討中ですので、次回のニュースレターで詳細についてお知らせする予定です。

松本カンガルーの会（病気の子どもと親を支える会）よりご寄付を頂きました。

〈平成 17 年度年会費納入のお願い〉

年会費の納入をお願いいたします。

年会費：5,000円を同封の郵便局の振込用紙にて納入してください。振込受領書をもって、領収といたします。納入期限は7月末です。

会費振込先：郵便振替口座 00590-9-79689
口座名称 日本小児がん看護研究会

ご不明な点がございましたら、研究会事務局（TEL/FAX：0265-81-5186・5184）まで、お問い合わせください。

日本小児がん看護研究会機関誌編集係

〒260-8672 千葉市中央区亥鼻 1-8-1

千葉大学看護学部 小児看護学教育研究分野

小川純子・伊庭久江

E-mail : junogawa@faculty.chiba-u.jp